

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

革命と演技

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学法学会 公開日: 2026-03-13 キーワード: 作成者: 永森, 誠一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001928

革命と演技

永 森 誠 一

- はじめに
1. 革命の言葉（以上本号）
 2. 革命の事実
 3. 革命の分類
 4. 革命の経験
 5. 革命の演技
- おわりに

はじめに

革命という言葉の用法に、ここでは、特段の説明を加えていない。政治用語としても、宣伝や広告の言葉としても用いられる、そのままを取り上げている。ことさらに分別はしない。無論、実用上は分類されている。日本語としては古い言葉であるし、比喩にもなり、ふくみもある。何が革命であるか、革命でないかという問いも、あえて避けた。改革や変革や革新のような、変化あるいは変動を表現する言葉との差異も、詳細には論じていない。言葉自体よりも、その用法を問題にはするが、ここでいう用法は、演技とともにある。この言葉が、演技を構成する要

素であることも、演技を支配することもある。人や組織が演じる革命の、その演技を問題にした。もとより、革命を演じて、それがそのまま革命になるわけではない。しかし、革命として演じて見せ、そう受け取られるのでなければ、やはり革命にはならない。無論、革命になるならないが、どれほどの意味をもつかは受け取る主体の問題であらう。

革命と同じく、演技のほうにも、改めて説明すべき特段の意味はない。主題に合わせて、改めて定義するまでもない。いくつかの辞典に見られる語義をほぼそのまま用いる。そのいくつかを列挙してみると、「観客の前で、芝居、曲芸、歌舞、音曲、体操などのわざを演じて見せること。また、そのわざ」(『日本国語大辞典第二版』第二卷二〇〇一年)、「見物人の前で芝居・曲芸・歌舞や、体操などの技を行って見せること。また、その技」(『大辞泉』増補新装版一九九八年)、「観客の前で、芝居・曲芸・歌舞・音曲などの技芸を演じて見せること。また、そのわざ」(『広辞苑第六版』二〇〇八年)、「俳優・芸人などが一定の演出に従って見物人に芸をして見せること。またその芸」(『新明解国語辞典』二〇一三年)となる。

これらに共通する演技の画面、行われ為される技芸や競技と、その技芸や競技を見せる技術と、この二つが重なって、分別がむずかしいことを強調しておきたい。また、見せる相手は鏡であつてもよい。観客や見物人の視線は、いわば客観として、それぞれの個体の成長と老衰にともない変容しながら内在する。組織もまた、運営の必要上、内部監察の目を備える必要がある。無論、観衆もまた組織され、みずからを組織して、観客を演じる。

演じる主体は、まず人であるが、身体の技術にとどまらない。人は組織人でもあるから、組織もまた人のように演じ、演じられる。たがいに、そうみなす。人が組織を代表して、組織する技術を演じ、あるいは組織される技術を演じる。組織が人に、人が組織に演じさせもする。組織を集団なり団体に置き換えてもよい。

ここでは、もっぱら技術という言葉を用いるが、技術を習得し利用する技能と、その技術を伝達し表現する技芸とが、やはりその分別しにくい両面をなす。競技もまた技能が強調されるとはいえ、見せる技芸の一面もあり、規則によって組織される。つまり、勝ち負けがあり、順位がつく。妙技を楽しむ一面も、無難ある。

こうして、革命と組み合わせ、演技を革命の技術、少なくともその一端とみることができると言える。革命の中に政治を見ることは容易であろう。政治の延長上に革命や戦争を見ることも無理ではない。政治は、おそらく革命も、ときに猿芝居や田舎芝居と揶揄される。劇場政治という表現が好んで用いられることもある。『ブリタニカ国際大百科事典』（一九七四年）の項目「政治」（岡義達）は、「政治と演技」という小見出しの中で、政治は本来「演技的」なもの、としている。演劇ではなくて演技である。それが「本来」であるかどうか、「本来」が何を意味するかは置いて、これに習い、革命も政治も、演技の一部、あるいは演題の一つというところまで考えを進めたい。演技は本来「政治的なもの」ともいえそうである。「本来」でなく「一面」かもしれない。

ここに至った多少の事情を書き留めておきたい。もともとこれは、水谷三公教授退職記念号（『國學院法學』第五二巻四号、二〇一五年三月）に掲載する予定で書き始めた。手始めに、学内の「近代研究会」（二〇一四年一月一日）で、「革命と演技」と題して報告してみたが、そこで止ってしまい、書き終えなかった。遅れること久しいが、改めて、同じ表題で書き直し、提出したい。停滞している間に、いわば尾鱗が付きすぎてしまい、長くなりすぎた。引用を積み重ね、注記をできるかぎり本文に組み入れ、読みづらくもなった。強弁するほかないが、演技は模写と引用の技術でもあり、翻って講演はもとより論文もまた演技で、論文なら文芸ということにもなろう。巧拙はともかく、政治学や政治を演じる文芸というわけである。

先の報告は、岡義達『政治』一九七一年（岩波新書）を解説する試みでもあった。「制度イメージの不安定化

は、それだけ多く指導者の演技の幅をますこととなる」という一節（一三二頁）から始めた。「内戦の極、革命が革命の理想からほど遠くなる」という一節、また「革命運動の場合、権力が既存の体制に属しない」という一節（一三三頁）も引用した。いずれも検証すべき仮説というのではなく、謎掛けの一種であろう。そうみなした。したがって、「革命と演技」を表題にしたのは、その謎掛けに対する答案の都合上ということもある。

この『政治』には、革命への言及も演技への言及もかなり多い。この二つを避けて通れない。政治は政治学の現れ、政治学を演じて政治となす、そう考えて、大学院の講義で、一端を披露してもみた。それを受けて、最終講義を「政治と政治学」という演題にした。他方で、演技は、『政治』の政治学をさらに展開する始点になろう。書かれるはずであったが書かれなかった岡義達『政治と演技』を、勝手に、引き継ぎたいと気に懸けてきたこともある。この「革命と演技」を、その入り口としたい。

二つの言葉のうち革命には、シグマンド・ノイマン (Sigmund Neumann : 岩永健吉郎・岡義達・高木誠訳) 『大衆国家と独裁』一九六〇年 (みすず書房) の残響を聞くことができる。副題には「恒久の革命」とあるが、こちらが原著では本題である。原著 *Permanent Revolution* (1942) では、副題は *The Total State in a World at War* であった。ノイマン没後に刊行された原著第二版 (1965) では、副題は *Totalitarianism in the age of International Civil War* と、おそらく編集者の手で、変更された。そこには、一九四九年に書かれた論文 *The International Civil War* (*World Politics*, vol.1, no.3, pp. 333-350) が反映されているにちがいない。この論文を、先の研究会報告では、いわば下敷きにした。

そこには、変容する政治用語あるいは用語法の一例をみることができるとなっている。「全体主義」となった。ノイマンの一九四九年論文でも、「全体主義」が用いられている。「国家」もまた「政治体制」と解釈されるよ

うになった。『大衆国家と独裁』重版（一九六四年）の「訳者あとがき」末尾に、一九六二年に亡くなる前、ノイマンは「この本の再刊のために、最近の全体主義政治体制に関する研究を系統的に研究していると訳者にまで伝えてきた」とある。それは「原著に対する大きな序章の形で発表される計画であった」という（二九五頁）。その計画は実現しなかった。

この原著と第二版の間にも、原著と上記論文（一九四九年）との間にも、第二次大戦がはさまれている。中国革命とロシア革命の間には第一次大戦があった。この間、「制度イメージの不安定化」が進んだであろう。「指導者の演技の幅をます」ことになったであろうか。かりにそうであったとして、その増幅は、どのような形をとったであろうか。

この時期、社会主義や共産主義はもとより、ファシズムやナチズムに代表される、無論そこに始まるわけではないが、さまざまな「イズム」あるいは「主義」が、二度の世界大戦と革命を経て、数を増し、広く流通するようになった。たとえば二〇〇七年には、「イズム」と「オロジイ」を合わせて四五三が数え上げられている（Arthur Goldwag, *Isms and Ologies*, 2007, Quercus）。その多くは「イズム」で、「イズム」は理念や概念の集合を、簡便に表示する記号をつくる。「オロジイ」は、記号の体系を表示する。革命は、戦争とともに、そうした記号を量産した。少なくとも、その好機となった。また、革命はそうした記号をつかって構成された。いくつかの「イズム」や「オロジイ」を実現する機会ともなった。「制度イメージの不安定化」を補償する、ときに過剰な演技であろう。その演技が指導者をつくり、指導者を独裁者にしたともいえる。

たとえば、かつての全体国家は、全体主義国家と呼ばれるようになる。フランツ・ノイマンの論集（Franz Neumann, *The Democratic and the Authoritarian State*, 1957, The Free Press）の表題に見られるように、「民主

主義的國家」と「全体主義的國家」とが対照される。フランツ・ノイマン『ビヒモス』一九六四年（みすず書房、原著一九四四年）では、全体主義は全体國家が作り出した、全体國家の象徴体系であるかのように描かれている（第一編第一章）。「既存の体制に属しない」権力を収容する新体制が求められた。実際に、全体主義は、その新体制が既成になったことを示唆する用語となった。その後広く用いられ、曖昧ではあるが便利な政治用語として、いまでも多用される。先の *Isms and Ologies* には、権威主義と全体主義を組み合わせた体制イメージの一例 (*Kirkpatrick Doctrine*) が挙げられている (p.61)。一九七九年、米中国交回復後の外交政策の枠組みとして、この体制イメージあるいはその表示記号が、外交における「演技の幅」を規定したといえる。他方で、政治権力を安定させる「既存の体制」が承認されたことにもなる。

また、たとえば『政治の本質』増補改訂版二〇一七年（中公文庫プレミアム、原著一九三九年）の訳者（清水幾太郎）序文は、「ヴェーバーは既にその歴史的命を生き尽くした自由主義の立場から、そしてシュミットは新しい全体主義の見地から、それぞれ政治の本質に関する見解を提示している」としている。それぞれの「主義」内容は別として、ヴェーバーもシュミットも、政治をいわば国家抜きで考え直そうとしたかにみえる。『職業としての政治』は、国家をふくめた「政治団体」の「政治」に着目し、シュミットも、国家で政治を規定するのではなく、「政治的なもの」で国家を規定しようとした。

こうして、国家や国家論抜き、ある意味では身軽な、また手軽な「イデオロギイ」あるいは「主義」の一つとして全体主義が認識された。簡便で明快な記号として広く流通するようになる。革命もまた全体主義という記号を通じて、国家あるいは政治体制に結びつけられる。他方で、革命は、戦争や暴力、殺傷や流血をともしない変動、ときに目に見えない変化をも意味するようになる。すでに産業革命があった。目に見えるその成果があり、さらなる

進化への期待もあった。その軽快さは、重々しい「世界観」や華々しいユートピア思想の枯渇とともに、「イデオロギーの終焉」(Daniel Bell, *The end of Ideology*, 1965) をもたらした。イデオロギーの重苦しさから解放されて、イデオロギーの自由な選択が承認されたといえる。選択肢も増していた。

産業革命がもたらした技術革新と経済成長のイデオロギーでは、「重厚長大から軽薄短小へ」といわれたように、次第に軽快と簡便が価値となった。「イズム」や「オロジイ」は、その価値を実現する記号になる。バーナード・ショー (George Bernard Shaw) のいう「プロレタリアートの資本主義」もまた、揶揄にとどまらず、組合運動の現実、あるいは現実主義の組合運動であった(参照 Daniel Bell, *The Capitalism of the Proletariat: A Theory of American Trade-Unionism in The End of Ideology*, 1965)。原著では、ソヴィエト連邦の現実を理解するためのアプローチであった全体主義が、『イデオロギーの終焉』(一九六九年、東京創元社)への序文では体制の分類になつてゐる。

そうした現実もまた「現実主義」の産物ということになろう。「イズム」あるいは「主義」は数多くの言葉と結びつき、資本主義も社会主義も、数多くの記号の一つとなる。それぞれに序列をつけるにいたらずとも、どのように加重するかが、価値の選択つまり価値観となり、ひいてはイデオロギーの選択ということになる。デモクラシーを民主主義と表記すれば、それは制度というより価値になる。

こうして、「主義」があれば、それを演じる「主義者」がいる。「主義者」の演技が「主義」となる。いわば持ち運びもできる。それぞれに選択した記号を身にまとい、まとわせることもできる。その着脱には、自在とはいえないくても、多少の自由がある。無論、その自由も価値で、そこにどれほどの重みを加えるかが、価値観でありイデオロギーともなる。もっとも、イデオロギーも「オロジイ」の一つにすぎない。

そこには、通信技術、つまり通信と記録のメディアと、通信され記録される情報の処理技術との革命がある。そこには、「オロジイ」や「イズム」は、この情報社会においては、高速で伝送され記録される大量の情報の、その伝送を一旦停止させて簡便に整理し、流通に秩序をつくる機能をもつ。流行やトレンドがつくられ、情報に意味が与えられる。転向が、その重苦しさを脱して豹変になる。伝染や感染にもたとえられよう。革命は、国家や社会がかかる。「はしか」にすぎないということにもなる。分散する小革命と、大革命への郷愁とが混在する。

それにもかかわらず、またそうであるからこそ、それぞれの革命にそれなりの新しさがあり、また新しさは革命を感じさせる。われわれは、その新しさに「かぶれ」て、その新しさを演じる。「かぶく」のである。映像の技術が、言葉よりも演技を表に立たせるようになる。映像の経験が、演技を変えていくこともあるにちがいない。しかし、新しさを演じるためにのみ、それもないとはいえないが、革命家になるとは考えにくい。以下、目次に示した項目にしたがって、たびたび重複するが、論述を進めたい。

1. 革命の言葉

多くの人にとって革命は、たとえば歴史の教科書にある、遠い日の、あるいは遠い国のできごとであろう。忘れたい革命体験をもつ人も少なくはない。革命の物語が強い印象を残すこともある。進行中の変事や動乱が革命として、映像をともなって報道されるかもしれない。ある革命は遠ざかり、ある革命は新たな記憶として再生される。革命の予兆が指摘され、期待や警戒が高まったりもする。こうして歴史は、人によっては、いくつもの革命が点在する風景となる。変動や変化の一つとして、革命はその風景に溶け込むかもしれない。

こうした革命の経験はさまざまに記憶され、あるいは記録され、また語り継がれて記憶や記録に残る。プリントン『革命の解剖』一九五二年（岩波現代叢書、原著一九三八年）の「日本語版のための序文」は、ロシア革命、フランス革命やアメリカ革命はもとより、「明治革命さえも」終わったとはいえず、「それが忘却されるまでは終わっていない」という。大革命への郷愁は残る。しかし、フランス革命もロシア革命も「恐怖と徳との支配」という特定の意味では終わったともいう（『革命の解剖』iv頁）。この「特定の意味」をさまざまに取り替えて、始まりと終わりを表示しようとする試みは、革命でも、たとえば戦争と同じく、繰り返される。一般に、何が始まり何が終わったかは、われわれの関心事でもあろう。

こうして、少なからぬ人、いくつかの集団や組織が、過去を特定し、再構成して、忘却を防ごうとする。革命が欠落した風景もないとはいえないが、記憶のその欠落を埋めようとする努力は、言葉によるにせよ、映像によるにせよ、常にある。

したがって、話を聞き、記録を読んで、革命を身近に感じる人もいるし、その同じ人が嫌悪を覚えることもあり、遠い革命を身近に引き寄せる試みも、革命の伝染を防ごうとする尽力も、またある。何より、革命をいう広告や宣伝を目にも耳にもしない日は、いまは少ない。すでに革命は、言葉としても事実としても、過剰かもしれない。健忘症にも、それなりの効用がある。無論、革命も数多くの、したがって記憶しきれない事実あるいは情報の一つにすぎない。すべてが記録されているわけでもないが、すべての記録を読めるわけでもない。革命の歴史に無知あるいは無関心でも不思議はない。しかし、革命という言葉はしばしば目や耳に入り、人はそれに動かされる。技術革新が予想外の革命をもたらすこともあろう。職業革命家を自任する活動家が、いまでもいることは不思議でない。

たとえば、革命家はサイバースペースにもいる。ニック・ビルトン『ツイッター創業物語』二〇一四年（日本経済新聞出版社、原著二〇一三年）に登場するハクティヴィスト Hackivist は、「プラカードではなくノートパソコンを、拡声器ではなくブログを使う。舗装道路ではなく、インターネットをデモ行進する」。それが「フルタイムの仕事」であるという（三六頁）。「イスト」がいれば「イズム」もあろう。それがどのような形で現れるか、その現れを感知できるかどうかは定かでない。攻撃されてはじめて気づくこともあろう。

たしかに、政治はしばしば気軽に、また手軽にツイートするところからも始まる。創業者たちが軽視し、採用を躊躇したハッシュタグ（『ツイッター創業物語』一五八頁）は、むしろ普及のきっかけともなったらしい。ハッシュタグが付くと、単語や短文に即時に文脈が与えられ、みずから分類し、争点をつくる。人や組織は、絶え間なく争点を、少なくとも話題を探しているにちがいない。二〇〇九年六月一二日に始まる、イラクの「ツイッター革命」で、その効用が証明されたという。この「革命」を追う形で、クリントン国務長官が、そのオフィスで、図解によるツイッターの使用説明を受けた（二七一から二七二頁）ともいう。

もともと、始めるのは簡単であるが、終わりにすること、始末をつけることは、政治も革命も、それほど簡単ではない。これまでと変わらず、争点が拡散した後には、政策の提示なり権力の行使なりが必要にもなる。そうした苦労をふくめて、ツイッターをつかって政治を演じることが奇異ではなくなった。新たな演技が絶えず工夫される。

この演技の主体、そのアイデンティティは、それぞれの申告による。虚実の境界が曖昧で、そこに演技の余地があることを、改めて意識せざるをえない。事実も真実も虚偽もまた幾通りかあること、そのことの認識も承認もすでにある。この承認を、あるいは承認の拒否を、つまり一つの事実や唯一の真実のほかは虚偽であるという確信を、演じなければならぬことにもなった。「指導者の演技の幅をます」（前掲『政治』一三二頁）好機にちがいな

い。それに見合う演技力が問われ、演出はもとより、演技指導も必須であろう。

しかし、これは事始めの話で、「竜頭蛇尾」や「終わりよければ」が示唆するように、仕舞いがむずかしい。革命は革命後に評価され、政治は結果責任であるともいわれる。忘れ忘れさせることができなければ、終わりを演じて終わらせるほかない。忘れたふりも、繰り返せばそれ自身が芝居になる。忘れさせないための、たとえば記念日や記念碑もある。何より記憶や記録がある。記憶や記録を避けて、不断に蓄積され更新されるデータを即時に処理し、そこから事実や真実を計測する方法が多用されるのも無理はない。法則や必然の発見よりも、「空気を読む」人工知能の構想が実用になう。

こうして、革命は革命を終わらせることで「革命後」に移行するが、その「革命後」を演じることで、革命は終わったことになる。終わったことにしなければ、つまり「永続革命」や「恒久革命」では、革命は終わらない。無論、終わらないことを価値とする価値観もあろう。革命は「革命前」を終わらせることでもあり、革命がもたらす新しさを演じることもある。この意味で、この新たな演技は、いわば後ろ向きになる。「主義」いうなら、保守主義ともいえる。保守主義は、一般に、新しさを後ろ向きに演じる。

それを一言でいえば、終わった過去の保守であろう。保守すべき過去を保守するために過去は選定され修正される。残された問題も解決されねばならない。終わった過去の変わらない事実が、現にある複数の事実や真実を分別する基準になる。しかし、選定にも修正にも見解の食い違いがあり、問題がすべて解決され消滅することはない。過去は終わらないばかりか、時間の経過とともに長く、見ようによっては深くなる。革命は過去を廃棄するか、忘れさせることによって終わらせようとする。保守は、その運動への抵抗であることになろう。いずれにせよ、終わらせようとして、終わったことにする。つまり、過去を、むしろ虚構にする逆説を否定しがたい。革命と保守が、

革命の保守もふくめて、繰り返されることになろう。「戦後」も「革命後」と同じ働きをする。

その「戦後」は、戦争を終わったことにする「終戦」、たとえば講和条約によって始まる。「戦後は終わらない」論が教えるように、終わった過去と終わらない問題が繰り返し矛盾を生む。終わらせようとする「戦後」は一つではなく、「戦後」の全体でもない。「戦後」を規定するには、「戦前」を発見し、発明さえしなければならぬ。戦争や革命を忘れるほかには、次の戦争や革命を待つしかなく、その過去は終えようとしても終わらない。終わったことにするほかない。

ここに、新しさとは別の、革命の契機があるのではないか。一つは、革命あるいは革命後を終わらせようとする革命、もう一つは過去を終わらせようとする革命である。ここでは、この二つを考えている。革命が改革や刷新とは違うものとして意識されるのは、それが過去の一掃、あるいは一新をめざすからで、過去のすべてを一気にいわば最終的に終わらせようとするからであろう。

こうして、過去を終わらせ、公定の事実にしようとして、そのための言葉が求められる。革命を始めるにも言葉が必要であったから、同じ言葉を別の意味で繰り返すこともあるが、新しい言葉も期待されよう。「総動員」が「総懺悔」となるように、繰り返しにも違った振りが付く。そうした革命の言葉は、始めるときも終えるときも、新しい権力によって、また新しい政策として、演じられよう。それは実は過去の再生でもある。

いわば、終わらない過去、繰り返し再生される過去が事実をつくりだす。その虚実あるいは虚構を受け入れて行動する、また行動を制御する言葉がある。革命という言葉自体その一つであろう。言語は異なっても、革命という言葉、また革命の言葉はある。どの言語にもあるとまでは言い切れないが、多くの言語にそれが認められるにちがいない。図像や画像、映像もまた言葉をもつ。言葉にして、正解であれ誤解であれ、それを解釈できる。言葉を言

葉に直して曲解することさえあろう。革命も言葉がつくる虚構というほかない。それは、終わってはじめて事実になるが、忘れるまで、終わることはない。

この意味で、人は、また国家も国民も、多かれ少なかれ、革命というその虚構の産物であろう。革命の記憶はとくに再生される。再生が強要されることもある。再現ではなく再現であって、振る舞いが革命の痕跡や名残をかすかに感じさせるところまで、ここでいう再生はふくむ。革命を口にするとき、革命の意識は、わずかにでも流出する。何らかの意図があれば、流出というより表出になろう。ここで「革命を演じる」とか、「革命が演じられる」というのは、まずそのことである。革命家が「来るべき革命」を論じるなら、革命に未来を演じさせることにもなる。かつて革命があつた、と嘆息することもあるかもしれない。

ここでいう革命の記憶は、戦乱や暴力の経験によつて、つまりそれがないよりは、あるほうが強化されるにちがいない。プリントンが「恐怖と徳との支配」という意味では革命は終わったとしたのも、それが暴力や強制の痕跡と印象を残したからであろう。革命は口先だけのことではない。しかし、国家がその産物であるとされような、つまり大革命と呼ばれるような革命と、政治体制の転換あるいは制度の変革を意味するいわば中小の革命と、さらに、たとえば技術革新の産物としてのいわゆる産業革命とを、ここではとくに区別はしていない。

特段の区別をしない理由は二つある。一つには、変革や改革、刷新や革新、また変化や進化とは違う言葉として、革命はつかわれるかもしれないが、その違いが伝わるとはかぎらない。伝えようとする自覚が常にあるかどうかも定かではない。革命が何であり何でないかは、それぞれの演技にふくまれる。革命の個性ともいえる。二つには、革命を起こす、あるいは革命が起きるといふときの革命を、政治や経済、社会や世界、また科学や技術というような分野のいずれかに限定する理由もない。さまざま分野が、ますます連関しあうというよりも、連関させて

考えざるをえなくなってきた、グローバリゼーションと呼ばれる状況がある。また、その限定、つまり革命の内容と分野を明示または暗示することも、無論、それぞれの演技にふくまれる。先に触れた一九四九年論文の冒頭で、ノイマンは、「革命の時代」をいうとともに、革命がさまざまな形容詞をつけて、変化を強調する日常語になった^(*)ともいう。

(*) ノイマンが例示した形容詞は以下の通り (Industrial : managerial : colonial : cultural : scientific : technological) で、「革命」はすでに一種のハッシュタグであったといえなくもない。

その「革命の時代」を代表する革命は、ボルシェヴィズムによる革命、したがって狭い意味での革命、あるいはノイマンが直面する革命である。それは終わっていない。むしろ、ロシア革命の産物としてのボルシェヴィズムという、勢いを増す「イズム」が主題ともいえる。それは他国に伝染し、人はそれに感染する。演じられるその「イズム」が、革命であることを際立たせるのは、強要や強制、暴力をとまなうからであろう。「歴史の必然」をいわずとも、「世界の大勢」、また流行やトレンドも変化を強いる。「同化」や「浄化」は、もとより強制であろう。「標準化」や「規格化」にも強制は感じられる。それが演じられるさい、革命は革命の名において強制や暴力を承認する、また承認させる言葉になる。そうであるからこそ、革命への抵抗感は小さくない。抵抗運動にもなる。しかし、不承不承の承認も、その演技によって、また革命を支える。不承不承も率先垂範も演技であり、とりわけ言葉の技術であって、そこに革命の言葉が増殖する機会がある。

革命の言葉とそれを用いる技術は、したがって、強制を、また暴力を排除するわけではない。「押しつけ」を免れがたい。さらに、ノイマンの一九四九年論文が、その表題 (The International Civil War) を示すように、「内

戦の極」（前掲『政治』一三二頁）である革命が、少なくとも伝染や感染によって、国境を越えるという問題がある。「越境する内戦」とするのは、意識にすぎないかもしれないが、社会主義革命が越境する、あるいは社会主義が革命の形をとって越境することを、ノイマンは問題にしている。それは全体主義の移植でもある、ボルシェヴィキによる革命の広がりの意味する。越境するのは、革命ないし内戦の技術としてのボルシェヴィズムということにもなる。それにともなつて、全体主義も国境を越える。ノイマンは、越境した内戦のリモート・コントロールにも言及している（p.349）。「イズム」による覇権ということになるか。

革命や内戦が国内で完結することは、むしろ稀れであろう。その訳語を素直に「国際内戦」とすれば、干渉や介入あるいは支援のために「内戦へと越境する」諸勢力がまず想起されよう。その意味なら、「国際化する」とか「国際化される」あるいは簡単に「国際的な」とするほうがいいかもしれない。実際に、デイヴィッド・アーミテージ『内戦』の世界史』二〇一九年（岩波書店、原著二〇一六年）では、「国際的な内戦」あるいは「国際化された内戦」とされている。参考文献の一覧には、上記ノイマン論文もふくまれる。

この論文で、当時を「グローバルglobal」時代とノイマンは規定している（p.335）。「グローバルな内戦」としておいたなら、いまを先取りしていたかもしれない。つまり「グローバルglobal」時代の「民衆popular」原則、あるいは「大衆原則 Mass Basis」が支配する（p.335）状況では、「全体主義 totalitarianism」が「制度化 institutionalization」されて「恒久の革命」となり、その「恒久の革命」が国境を越えて広がる。いわば、革命のグローバル化である。したがって、組織された「民衆」や「大衆」や「市民」が「越境してきた内戦 International Civil War」を戦うことになる。その危険が警告されている。先の『内戦』の世界史』も、「グローバルな内戦」が、現代の難問であり、古くから難題でありつづけてきたという（第六章）。内戦が革命の衣装をまとうと

はかぎらない。革命が内戦の衣装かどうかも断言できないであろう。一九四九年の「現代」を、革命の時代とノイマンは呼んでいるが、いまは、むしろ内戦の時代ということになるかもしれない。

同書の用語の中には「革命的な内戦」もあり、「アメリカ人は、次の二〇〇年間で世界中で模倣されていく、真に革命的な内戦の概念を提供した」ともいう(一一七頁)。内戦のこの「革命的な概念化 revolutionary conception」が、革命の言葉を際立たせ、一八世紀から一九世紀にかけて、一連の「革命的な内戦」に、またその後の「革命」にも寄与したことになる。その「革命」が、革命の言葉を拡散させたわけでもある。フランス革命がそれを引用し、またフランスの「革命」がアメリカの内戦に引用されたといえる。「一九八九年以後は、複数の革命 revolutions は単数の革命 revolution になった。自然で不可避的で、人間の統制を超えたものに代わって、自発的で、計画され、繰り返されるものとなった」という(一三四頁)。ノイマンの一九四九年論文では、それはむしろロシア革命あるいはボルシェヴィズムがもたらしたもの(p.337)であった。これもまた拡散し、先の革命概念に対立する概念となった。

このように、内戦と革命とは、たしかに互いに模写し引用しあう。前掲『政治』の謎掛けの一つに、「たとえ戦争状態になくとも、外敵―そしていづれは内敵を指定して、自由のために軍産複合体をつくることもできる」という一節がある(一三二頁)。敵を、またその敵から見た敵を、任意に選択し規定できる「自由」が、そこにはある。ボルシェヴィズムやファシズムに代表される全体主義や権威主義を、「自由のために」敵とすることにどまらず、テロリズムを敵にすることもできる。異教あるいは異宗派を敵とすることは、むしろ伝統であろう。ある意味で、これは「戦争の自由」でもある。「恒久の革命」にはもとより、どの内戦にも、したがってどの国家にも、どの政治運動にもそれは潜在しているといえる。この意味では、「恒久の革命」は、まだ終わっていないし、文字通

り終わることはない革命といえる。政治は、その別名ということにもなる。その革命を回避することも、その革命から政治を救出することもまた政治になる。革命の内容も分野も、したがって政治のそれも次第に広がることになる。

そうした革命というよりも革命の言葉に、行先は不明でも、いま乗らねば乗り遅れてしまう不安が、かきたてられることがある。革命という言葉は、ほかの言葉、たとえば戦争や独立、あるいは内戦とともに、意識の乗り物、つまりメディアとして時間の往來また空間の移動に用いられる。また、その時間や空間を、いわば搬送する。言葉を遣わして、過去や未来のイメージを呼び出し現前させる、といってもよい。過去の亡霊もまた呼び戻される。近隣からも遠方からも、言葉に乗せられ、革命が訪れる。世界が広がり、過去の風景も将来の展望も違つて見えるかもしれない。イメージの材料となり、それを形づくる情報も運ばれてくる。「イズム」あるいは「主義」は、多くの「イスト」や「主義者」が携帯するメディアであろう。無論、「イスト」も「主義者」も、「イズム」や「主義」を持ち運ぶメディアである。

そこで演じられるのは、革命の内容というよりは、革命との距離や距離感であろう。何が革命であるか、革命でないか、それを表現し、伝達しあうとしても、分有される内容の共通の表示、つまり革命という言葉がまずあり、表示は同じでも、内容は異なる。したがって、革命という言葉との距離、革命を連想させる言葉との距離感ということにもなる。

これらを一つの集合として、革命の言葉というすると、それは革命のイメージを構成し、また革命がいわば散布するイメージでもある。人によって、また集団や組織によって異なるが、重複する部分が少なくない。さまざまな革命というより、革命のさまざまなイメージが、距離感に応じて配置される。ある革命は遠く、ある革命は近

い。遠ざかる革命があれば、近づく革命もある。個人の間でも、集団内でも、また集団間でも、革命との距離と距離感を表現し、伝達しあい、ときに共有する。つまり、革命との距離というより、革命という言葉、そして革命の言葉との距離感であろう。一種の遠近法が働く。遠近法を働かせる技術もある。

こうして革命が演じられるなら、技法や巧拙もあるはずで、その技術や技能、つまり革命の演技が、ここでの主題である。革命することを、演じることから除外はしない。革命のふりでは革命にはならない、ともいわれよう。革命のつもりでは済まないこともある。実力や暴力は、演技の沙汰ではないが、「限定戦争」の一面は、メッセーヂを伝えるための戦闘であろう。革命するにも、ふりを見せ、つもりを示さなければ、事変や変動であっても革命にはならない。革命には革命前も革命後もあるから、革命すれば済むというものでもない。革命には革命の、革命後には、革命前とは違う演技が求められる。日本語でいうパフォーマンズの、ふりをして見せる、芝居掛かる、一芝居打つというようなニュアンスを、ここでいう演技から排除しようとするわけでもない。

この演技は、まずは言葉に振り付けをして見せる、その振り付けの技術である。「イズム」を演じて「イスト」になる。「主義者」を演出して、「主義」を体現させる。言葉を小道具につかい、捨て台詞や決め台詞、殺し文句もあるように、人なり状況なりを言葉に演じさせることもある。ひとり芝居もあるが、演技と演出を分担することもあろう。

そのさい言葉は言葉を呼び出し、また追い返すから、革命という言葉が呼び起こし、呼び出す言葉の集合を、革命の言葉と呼べる。無論、呼ばれない言葉、その集合から忌避され排除される禁句もある。この集合では、言葉が運ぶイメージと、すでにあるイメージとが重なる。政治も革命も「いきもの」になろう。演技がそれを「いきもの」にする。たとえば演説は、ある集合を演じ、振りを付けて聞かせる技術であり、それを見せる技術でもある。

聞き手の内部に、無論話し手の内部でも、さまざまなイメージが喚起され、興奮や熱狂を呼ぶ。抑制や沈静のための演説もあろう。演芸、ことに話芸なら、その集合が何であれ、言葉を自在に呼び起こし呼び出す、その技術を開かせ、また見せる技術ということになる。技術というよりは、芸術とされるかもしれない。鑑賞の対象にもなり、喚起されるイメージには興趣、興行き、あるいは深み加わる。ここにも言葉の遠近法とでも呼ぶべきものがある。

この革命の言葉を用い、身振り手振りや暴力もまじえて、時間と空間を造形することが、革命の演技では、仕事になる。造形とまではないえないかもしれない。まずは、始めたこと始まったことを、どのように終わらせるか、終わったところから何をどう始めるか、後始末をどうするか、膨張や収縮をどこで止めるか、境界をどう設定するか、というような、ある意味では単純な問題を処理する技法にすぎないともいえる。戦争も占領も期限を切れば、役職も任期を定めれば、始まりと終わりが明示されることになる。目標を明示して、それを達成するなら仕事は終わる。明示はされても従事されないこともある。期限や任期いっぱい仕事をし、潔く退くことを表現する演技が、改めて求められる。空間でいえば、境界の標示があっても、標示を動かし、境界線を引き直そうとする勢力は絶えない。その勢力に対抗する演技も、なくては済まない。見て見ぬふりは容認されたい。

したがって、ある体制が終わり、新たな体制が始まる時、またある体制を終わりにし、新たな体制を始めようとするとき、そこに浮上する断続問題の解法として、少なくとも解法の一つとして、革命があり、革命の演技がある。そのさい、たとえば領土の拡張や保全のような空間の構成は、体制の時間と相関している。ブレスト・リトウスクの不利な講和条約で「敗北」し、領土を失っても、「和平」によって革命を防衛するという、レーニン版「テイルジットの和平」が、その一例であろう（『レーニン全集』第二十七巻、一一五頁、一九五八年、大月書店）。領

土は、革命後に回復できるかもしれないが、革命は「いま」を失えば完遂できない。『国家と革命』の執筆を中断したさいにも、「革命の経験」を優先するとレーニンは書いたが、敗戦であつても戦争を終わらせることで、始まったばかりの「革命の経験」を終わりにする、つまり革命後を始めることができる。そういう判断であろうか。七〇年後の「ソ連の解体」も、その繰り返し、ということになるかもしれない。

こうして、ある意味で問題は単純であるが、その解法の一つである革命は、かなり複雑に演じられる。暴力を用いても、単純な問題を複雑にししか解決できない政治技術として、革命がある。暴力を用いることで、より以上の演技が必要になり、余分の言葉も用いられ、いわば解決しすぎようとして、かえって問題そのものを複雑にしてしまうことにもなる。「戦争を終わらせる戦争」(H・G・ウェルズ)であつた第一次大戦も、ナチスによる「最終的解決」も成功しなかつた。「正義の戦争」を言い出せば、その「正義」が問題となる。「暴力革命」では、革命後に「暴力」の処遇が問われる。

この暴力は、たとえば軍備の増強と削減とを繰り返すことで、また武力を行使して見せることで、伝達や表現の機能を果たす。殺傷や破壊も一種の言語になる。暴力によらない言語をふくめて、こうした言語による伝達や表現は、人や組織が言葉を演じる技術、つまり演技にはかならない。演技の不足ともいえるし、過剰な演技ともいえる。人の言葉が人を動かし、徳も不徳もそこに表現される。神の言葉も人が語れば、神聖でもあり滑稽にもなる。舌足らずを補い、へらず口を押さえる暴力が求められるかもしれない。

革命では、古い言葉を用いて、その古さを改めつつ、新たな体制を表現することになる。革命前と革命後については、新しい言葉も用意されなければならない。新しいメディアも必要になる。要不要にかかわらず、技術革新の産物として、新たなメディアが出現することもあり、それ自身が革命でありうる。メディアの種類が増えれば、母

語の習得や国語教育に加えて、多種多様のメディアから言葉の注入がある。それぞれのメディアが、それぞれの言葉の世界をつくる。言葉の共有や言葉による共感はずしも容易ではない。ここでは、メディアごとの言葉の違い、したがって演技の相違を論じる余裕はないが、先のハクティヴィストの例が示すように、そのことが重要になりつつある。

こうして、人や組織がますます多弁になるという進化の途上で、とりわけ革命が多弁になるとはいえないかもしれない。しかし、革命が、多数というよりは大量の言葉を内包したカプセルとして流通し、またそこに折りたたまれた言葉が展開されることで、記憶や記録に残る経験、また事実をつくってきたことは否定できない。革命は、その意味でも、すでに過剰かもしれない。種類も増えて、分類が必要となり、たがいに分類しあい、いわば革命のアイデンティティが求められるようにもなった。

日本語の革命に当たるヨーロッパの言葉が、一方向への避けられない変動を意味する、したがって復古ではあっても、旧に復さない、また新しさがあることを意味する政治用語として、ヨーロッパで用いられはじめたのは一七世紀半ば以降のことで、一六八八年の「名誉革命」前後が、分岐点になるといえる（Ilan Rachum, *Revolution*, ch. 1-3, 1999, University Press of America）。それを革命と呼ぶかどうか、議論は分かれるが、復古が復旧でないことは、言葉というよりは事実で示された。ヨーロッパの政治は、この政治用語を受け入れる用意ができていた、あるいは受け入れざるをえない状態にあったであろう。

したがって、この言葉が、ヨーロッパの政治に「革命」という新たな経験をさせることになった。その経験に、「革命」という新たな名称が与えられた、というべきかもしれない。革命を経験した政治が、およそ二世紀後に、日本に到来したとき、日本語の革命は、その経験を表す言葉 *revolution* の「訳語として再生したとみるべきである

う」と、『日本国語大辞典第二版』の「語誌」はいう。早い用例の一つに、福沢諭吉『西洋事情』（一八六六—七〇年）から、「兵乱に由りて俄に政府の革まるを革命と云ひ」が挙げられている。^(*)古来用いられてきた言葉を急いで「再生」すべき事情があった。急激な変動が、それを表現する言葉を求めたであろう。それを受け入れ、ためらいなく用いる素地も、当時の日本にはあったにちがいない。

(*) 福澤諭吉『西洋事情』二〇〇九年（慶應義塾大学出版会）一三六頁。解説によれば、原著は、Political Economy for use of schools and private instruction. 1852 である。原文は確認してこなかった。

しかし、演技は、言葉に振りを付けるにとどまらず、それによって事実を構成していく技術であるから、構成されるべき事実によっては、言葉の選択が課題になる。当時の変動を、「維新」であり「復古」でもあると規定したとき、たとえば天皇の呼称、つまり新しい体制を左右しかねない象徴をどの語形にするか、いわば政治の苦労があった。時間をかける必要がある、実際に長い時間をかけた。この「明治の新鑄ではない」古語を採用するにつき、「元老院が立案した最初の憲法草案の中では、天皇は皇帝という語形で表されて」いたという。「草案がくり返しくり返し手を加えられて最終案に煮つめられる過程で、天皇という形は、時とともにまったくおぼえずおぼえず登場してきた」とされる。^(*)その名称に将来の体制を表現させる必要と期待があり、そう呼ばれることになった天皇に、新しい体制を演じさせなければならぬゆえの苦労であった。新しい体制を演じるにふさわしい用語でなければならなかった。

(*) 亀井孝「天皇制の言語学的考察」『中央公論』一九七四年八月号、一五五頁および一六二頁。原文はドイツ語で、訳者（寺柚

正夫)の解説によると、ベルリン自由大学で、一九六七年から六八年にかけて、同大学日本語学科の学生を対象にした、ドイツ語での講義録を、「思い切り刈りこんだ」形で、日本語に訳したものである。なお、「言海」(一八八九―九一年)では、てんわう(天皇)は「大日本國二君臨セサセタマフ大君主ノ大尊號」とされ、この言葉は「明治の新鑄」ではないかとさえ思わせる。「てんわう」は「天皇、又、天王ノ遮聲」となっている(二〇〇四年、ちくま学芸文庫)。

それは、言語が「制度を表現する制度である」(岡義達『政治』一五七頁)ことによる。もつとも、「言葉の暴力」があるように、これは言語の一面であろう。あるいは、言語という制度の運用が、運用の失敗もふくめて、そこにかかわる。表現される制度の運用は、その制度を演じること、その演技でもある。天皇の体制でいえば、この制度の体系に対応すべき儀礼の体系も用意されねばならなかった。その儀礼もまた、古くからある天皇という言葉、その語形にかかわる。天皇の儀礼、あるいは宮中儀礼を中心にして、体制つまり儀礼の体系が整えられることになった。

儀礼は定型の反復を原則とする。反復する演技の習得は、「学んで習う」演習によるが、演習は必ずしも常に完璧な実演を保障するものではない。定型は崩れることがあり、崩されることもある。そこに、儀礼とは区別される演技が発生する余地があり、また演技によっていわば添削しなければならぬ儀礼の過不足も生じる。定型と変形は、相補う。この相互作用によって、人や組織は、儀礼を演じるにとどまらず、言葉を新たに、また改めて演じて事実にし、虚構を演じて制度にする。制度が更新され、演技は儀礼に帰着する。儀式と演劇の間にある親近と疎遠は、そこに由来しよう。

他方、理念や概念、あるいは思想や科学という、言葉で構成された虚構を演じて、また実験して、事実や制度にしようとするなら、それは構想や理念の実現、あるいは政策や計画の実施ということになり、さらに法則の確立で

あることにもなる。この法則を運用する技術もまた、儀礼に似て、定型の学習や訓練を必要とし、その技術の巧拙もあるにちがいない。目に見えないコトをつくる技術と、目に見えるモノをつくる技術とが、まったく別とはいえない。そして、この技術は、革命にさいして「新鑄」をふくむ言葉の量産にいたる。

こうして儀礼の体系は、制度の表現というよりは表示で、言葉の体系でもある。制度の運用は、言葉に振りを付ける技術、つまり演技による。制度の改定、つまり制度の表示が改めてなされるなら、それは、変動中ではなく、すでに変動後であることも示す。変動の過程にあつては、演技に苦勞する。演技の試作試行も必要になる。演技指導、あるいは振り付けの作業工程は、メーカーや衣装合わせもあるが、言葉遣いの練習でもある。とりわけ、組織を代表する場合には、言葉の選択に敏感にならざるをえない。こうして、変動は、変動中はもとより、変動後にも、言葉の量産を継続させる。この変動を革命と呼ぶことで、量産された言葉の一部に、たとえば「主義」あるいは「イズム」を核にして、ある関係が構成され、連想が効くようになり、革命の演技もまた一種のスタイルをもつようになる。

さらに、言葉の量産は、語義の分化とともに拡張に結びつく。上記辞典では、島崎藤村『破戒』（一九〇六年）から、「其精神（こころ）の内部（なか）の革命が丑松には猛烈に起こつて来て」という一節が引かれている。『千曲川のスケッチ』（一九二二年）にも、「鉄道は自然界にまで革命を持来（もちきた）した」とある。雑誌『中学世界』に連載された、平明な言文一致の文体にも、違和感なく用いられた。明治年代の言文一致運動による「基礎工事」があつたと、その「奥書」は述べ、この「基礎工事」の前になされた「二つの大きな仕事」として、「徳川時代に俳諧や浄瑠璃の作者があらわれて縦横に平談俗語を駆使し、言葉の世界に新しい光を投げ入れたこと」と、「あの国学者が万葉、古事記などを探求して、それまで暗いところにあつた古い言葉の世界を今一度明るみへ持ち

出したこと」とを挙げている（『千曲川のスケッチ』岩波文庫二二二頁）。鉄道が自然界にもたらしたその「革命」は、鉄道沿線に繁茂する「鉄道草」ヒメムカシヨモギ、あるいはメイジソウ（明治草）、またゴイツシンングサ（御維新草、また御一新草）であったが、それは言葉の繁盛をなぞらえたものとさえ思われる。そして、『千曲川のスケッチ』は、「文学の革命」とされてもいるし、「江戸時代より明治へとうつる、精神の鏡としての言語的飛躍」の一例とも見える。この飛躍が、革命の演技を有効にする。

（*） 島崎藤村『破戒』一九五七年（岩波文庫、二〇〇二年改版）一一八頁。『千曲川のスケッチ』一九二七年（岩波文庫、二〇〇二年改版）一四八頁。

（**） 『千曲川のスケッチ』同上、二二六頁、井出孫六「解説」。および、亀井孝「天皇制の言語学的考察」同上、一六三頁。ヒメムカシヨモギの俗称は、『世界大百科事典』（平凡社）による。

こうして、「維新」以降の国家や国民、体制や社会、つまりは「われわれ」がその産物、また産物の産物であることは、さまざまな機会に、革命という言葉、革命に類する言葉、またそれに関係する言葉を通して、繰り返し教ええられる。忘れることも多いので、記念や復習も必要になる。「戦後」には、それを革命と呼ぶかどうかはともかく、また新たな言葉が教えられることになった。その影響は、「われわれ」の出来不出来にも、ときには及ぶ。出来不出来の規準や規格も改められよう。国民なり臣民なり、民衆であれ大衆であれ、市民や社会人も、「維新」や「戦後」の、いわば革命の産物として、その産物である人によっても組織によっても、それなりに、つまりその基準や規格に引照しつつ、演じられる。

そうした革命の言葉を、みずから口にするにせよ、他人が口にするのを聞くにせよ、その言葉の記憶が人の振る舞いに反映される。どの革命にも、その革命の意味があり、「われわれ」各人にとつての意味があろう。革命の意

味がそれぞれに演じられ、また革命との距離感がそれぞれに演じられる。演じて見せるとともに、演じさせる、あるいは演じさせられるということもあるから、距離感は、演じる主体の自発性にも左右される。しかし、この自発性もまた演技の問題であって、たとえば、すすんで行う「自主規制」は、むしろ強い規制あるいは統制を避けるためでもある。

人それぞれが、革命にどのような意味を求め、遠近の距離感をもつにせよ、人が革命の産物であってみれば、その革命が何であったかは、人を見れば分かることにもなる。好ましい人を産出した革命なら、好ましい革命にちがいない。アイデンティティを革命に求めて、「われわれ」の革命と「かれら」の革命、好ましい革命と好ましくない革命とを二分するのも一法であろう。^(*)さらに進んで、格付けまでも考えられる。たとえば、暴力の有無を基準にすれば、「名誉革命」はもとより、「無血革命」も人によっては価値ある呼称となろう。産業革命や情報革命なら、進化の途上にいわば新製品や新人類、新世界や新次元を産出する、あるいは産出したと位置づけられる。その意味で、特段の価値を認められるかもしれない。そこに進化でなく退化を見る意見があるとしても、革命という言葉が、広告宣伝に用いられる理由にはなる。

(*) 参照: Eagleton, Terry, *Why Marx Was Right*, Yale University Press, pp. 182-183.

ここでは、この「言葉の海」から、政治用語として、「革命」をすくいあげることとは避けた。古くからある日本語の革命に当たる外国語の「訳語」が、その中にさまざまな痕跡や残響をふくみつつ拡張され、さまざまな意味で用いられてきたし、用いられていることが現実であり、その現実の意味がある。革命の言葉全体について、多義を多義として、人それぞれに、また組織ごとに、実用される言葉を垣間見るにとどめた。すでに政治用語としての革

命は、日常語の中に埋没しつつある、とも見える。

したがって、革命の言葉全体とはいふものの、輪郭は曖昧で、「革命の現場」があるとすれば、そこで用いられる言葉が、革命の言葉としてある程度は際立つ。ある程度は、というにすぎない。単なる「現場の空気」にすぎないこともある。その「現場」は、いまでは、たとえば録画中継の映像としてメディアがつくるから、そこで発せられる言葉が、革命の言葉としても受け取られよう。その「空気」が伝染することもある。

少なくとも、そうしたことが実用の一面であり、また言葉の持ち味が生かされるという意味で重要な一面でもあって、むしろ、そこに政治ないし政治学の素材が見つかるであろう。逆に、分析用の概念としては使い勝手が悪い。ことさらに政治用語としての革命を拾い上げ、またその用途に限定して用いても、かえって実用面から遠ざかる危険がある。無論、このことは、革命という言葉にかぎらない。

いうまでもなく、訳語として「再生」された革命という言葉は、「再生」以前から用いられてきた言葉、その用法に残された記憶の再演でもある。「訳語」であるから、原語に残された記憶もまた再演される。はっきり二層であるとはいえないが、いわば外から持ち込まれた記憶が古来の記憶に重なっている。この「再生訳語」は、アメリカ革命とフランス革命後、明治維新にさいしての、いわば改鑄であるが、それはロシア革命前でもあった。ロシア革命後、さらに別の革命のたびに、記憶の重なりが生じよう。奥行きとか深みとかいうのは、その重なりを意味する。こうして、革命の演技は、多少とも複雑に、また微妙にならざるをえない。ときに新鮮味が必要にもなる。状況に応じて、演技のノウハウも求められる。革命の意義も、その正義と利得も、改めて問われよう。

こうして「真の革命」を論じ、革命とは何かを議論し、その結果、革命のさまざまなモデルを造形することにもなる。簡便に、アメリカ革命をフランス革命で、フランス革命をロシア革命で、ロシア革命をその後の革命で、い

わば上書きすることもある。革命の先例に、新たな革命が学ぶ、模写し引用することも少なくないにちがいない。複数の革命が同時進行するなら、情報交換も当然にあり、たがいにモデルなり症例なりとして、相手を見ることもなろう。

そうであるからこそ、それぞれの革命が個性を主張することも避けられない。それぞれにアイデンティティがあり、何より言語を異にする。たがいに翻訳可能であるにしても、その壁を越えるのは容易ではない。その壁を越えて、つまり革命のグローバルな展開と見て、明快に、たとえばブルジョア革命と社会主義革命の二段階、また社会主義革命後の民主主義革命という三段階での展開も、理論としてはありうる。しかし、理論が事実を保障するわけではない。それら理論が、また理論を用いて革命が、どのように個別に演じられるか、その演技が革命の事実をつくる。もつとも、その事実が理論を実証するわけでは、やはりない。